

北の天国



井上勝夫



北きた
の
天てん
国ごく

井上勝夫

ああ、ゆらゆらと、雪が降りてきた。黒い空の上から。

ぼくは高い丘の上の、畑の土の上に腰を下ろして、ぼんやりと景色を見ていた。丘のふもとには右手から左手まで、ずっと平らな地面が広がっていて、そこはほとんどが田んぼと畑で、ぽつりぽつりとお家の光も見える。もっと遠いところは森だけど、今はただの真つ暗の黒で、何もみえないに思える。それから森のまだ奥には、大きな山があるけれど、それは頂上のほうがぼんやりと見えなくなっていて、夜の空に溶けていつちやったみたい。

もうすぐ冬なんだなあ。それとも雪が降ってるってことは、もう冬なのかな。確かに、いつの間にかこんなに寒くなって、今、ぼくの体もとても冷たい。けれど体の上に落ちた雪はすぐに溶けていくから、まだ雪よりは体が暖かいってことだよ。ぼくにだって、それくらいのは分かる。雪は暖かいところでは溶けて、天国に帰っていくんだ。

ぼくが初めてフラノに来たとき、今いる場所は広い広い大麦の畑だった。丘のてっぺんから半分がもう、一面の金色に光っていた。畔道で分かれた別の半分はニンジン畑。細かい柔らかそうな葉っぱが、暖かい土の上にきちんと緑色の列を作って、森の端まで続いていた。今はどちらも、枯れ草が混じった冷たい土だけだね。

あの時はここに、カチくと、ウメちゃんと、マメヤンと、ジルさんがいた。女の子はアミちゃん、ミルコちゃん、それにキョウコちゃん。

ぼくははつきり分からなかったけど、この中で本当の名前なのはキョウコちゃんだけらしい。あとは『キャンパーネム』っていう、お互いに勝手につけたアダナが名前になっているそうだ。なぜだかぼくは、いつの間にかみんなから、『ドラ』とか『ドラちゃん』と呼ばれてた。本当の名前はケンイチなんだけど、べつにそう呼ばれることは悪い気持ちじゃなかったな。ぼくはチュウニチドラゴンズが好きだし、いつも見ていたマンガの青い猫の名前みたいだから。

ぼく以外の人は、みんなオートバイに乗っていた。女の子たちもだ。大きなバツタみたいな形をしたオートバイが多かったけど、色は青とか白とか緑とか、赤とか黄とか黒とかで、とてもかっこよく見えた。マメヤンのオートバイはみんなのとは形が違って重そうで、音もみんなのよりも大きくて、ぼくは近くに寄るだけでドキドキしていたものだ。

この丘にみんなで来たときは、ぼくはウメちゃんの赤いオートバイの後ろに乗せてきてもらったんだ。オートバイに乗るときには、ヘルメットを被らなければいけないそうで、ぼくは小学生の時に自転車に乗るときに被ってたのと同じような、黄色いヘルメットを被っていた。キャンプ場にあったやつ。きっと誰かが忘れていったんだね。勝手に使ったから、その時からいつもぼくが使っていた。誰かさん、ありがとう。

オートバイの後ろに乗るのは、その時が初めてだった。走り出したときはとても恐くて、ぼくはおしっこをちびらないようにガマンしてなければならなかった。最初に曲がったときなんかは、オートバイが傾いて倒れそうになったから、ぼくは恐くて大声で叫んじゃった。ぼくが重いから、転ぶんじゃないかと思ったんだ。でもウメちゃんは曲がる度に、オートバイをうんと傾けた。ぼくもその度に叫んだけど、そのうちになんだかそれが楽しくなってきちゃったから不思議だな。ぼくは相変わらず叫んだけど、それは楽しくて叫んでいたんだ。

フラノでは、ここが一番好きな場所なんだと、この丘に着いたとき、みんなをここに連れてきてくれたカチくんが言った。カチくんはぼくが知り合ったライダーの中では一番かっこいい人だ。子供の頃、イッシュョケンメに見てたテレビに出てくる正義の味方のお兄さんみたいで、ぼくはカチくんがひよつとしたらいつか変身するんじゃないかと、ちよつとわくわくしていた。でもここには誰も悪い人がいなかったから、カチくんがヒーローだったとしても、変身する必要がなかったんだね。

とにかく、この丘に着いたときはすごくお天気が良くて、みんなは大喜びだった。丘からの眺めは、大きくて、広くて、まぶしくて、それまでぼくが見たどんな景色よりもきれいに見えた。丘に立っているみんなの服も赤、青、緑、紫、だいだい橙、黄緑、ピンク。とてもきれいだった。ぼくは自分の体には少し小さいような、ネズミ色の汚れたヤツケを着ていたから、全ての景色の中で、ぼくだけが汚かった。

一番遠くに見えるトカチレンポウって山は、六つの頂上がある高い山で、その一つのでっぺんのあたりでは、白い煙が上がっているのが分かった。カチくんが言うには、オンセンが沸いているらしい。

山の裾野には深緑色の森があつて、手前に来て地面が平らになると、そこからは田んぼと畑がいろいろな緑色の四角を作って広がっていた。赤と青の屋根のお家たちが、なんだかおもちゃのお家みたいに小さく見えて、ぼくはうれしくなって「ばんざーい」と叫びな

がら、何回もジャンプしてしまった。そんなぼくを見てみんなは笑ったけど、それは今までぼくのことを笑った人たちの笑いとは違って、ぼくも楽しくなる暖かい笑いだった。だからぼくは張り切って、何度も何度も叫びながら走り回ったんだ。

すると、ぼくのところにはキョウコちゃんがやってきて、笑顔でぼくの手を握った。女の子と手をつないだのは、ずっとずっと昔のこと以来なかったから、ぼくはうれしいのと一緒に、ドキドキしすぎて恥ずかしくて仕方がなかった。

でもキョウコちゃんはぼくの手を握ったまま、大麦の畑の中に走り出したんだ。ぼくは手を引かれるままに走った。畑の中には小路こみちがあつて、緩い下りのその小路を二人で走っていくと、目の前と左右に広がる大麦の穂は、まるで金色をした海の波のように揺れて見えた。

ぼくはイッショケンメに走って、気づいたら、ぼくがキョウコちゃんの手を引つ張って走っていた。キョウコちゃんの小さな手は暖かくて、とても柔らかい。振り向くとキョウコちゃんは楽しそうに笑ってる。ぼくと一緒にいて楽しそうしてくれる女の子は、キョウコちゃんが初めてだ。キョウコちゃんがまぶしく輝いて見えたのはどうしてかな。着ているのが、蛍光の黄緑色のジャンパーだったからかな？

ぼくはキョウコちゃん的笑顔を眺めたまま、ずっと畑の斜面を走り続けた。キョウコちゃんの後ろには、金色の畑と、見たこともないくらい真つ青な空が広がっている。空には白い雲が、くもくもと勢い良く立ち上がっている。ぼくは全ての景色と、キョウコちゃんに見とれた。

そうして後ろを向いて走っていたから、ぼくは足がうまく動かせなくなつて、転んでしまった。大きなぼくの体が倒れたとき、本当に地面が揺れたように感じた。手を握ったまままだつたから、キョウコちゃんも隣に転んだ。

痛くなかつたかなと思つて謝つたのに、なぜだかキョウコちゃんは大笑いしていた。だからぼくも笑った。本当に楽しくなつて笑った。空を見ると、ぼっかりと浮かぶ白い雲も笑つていて、ぼくは雲に両手を振つて挨拶をした。「おい、くもー、元気ですかあ」つて。キョウコちゃんも雲に向かって手を振りながら、「元気だよー！」つて、なんだか返事みたいな言葉を叫んだ。雲に向かってしゃべってるなんて、自分以外の人は初めて見たな。普通の人は返事をしてくれないものになんか、しゃべりかけたりしないものね。

その時からぼくは、キョウコちゃんのことをがうんと好きになつたんだ。最初に一目見たときから、好きだつたけどね。かわいいし、きれいだし。きつとビジンつて言うんだろう

な。背は女の子にしては高いほうだと思うけど、ぼくよりはやっぱり小さかった。体重なんかはぼくの半分もないだろうな。ときどき、くるりとしたらずら猫みたいな目になるときがあったけど、そんなときはいつそうかわいく思えちゃって、なんだかぼくの体は、日向水みなのオタマジクシみたいに溶けそうになってしまふんだ。

キョウコちゃんは髪もきれいだったなあ。肩までの長さの髪の毛が、いつも風にそよいでいる感じで緩くカーブしている。明るい太陽の下に行くと、普段は真っ黒なのに、きらきら光って何色だか分からなくなるのも好きだった。

それに、にっこりと笑ってぼくを優しく見つめてくる目は、なんだかぼくのお母さんに似ていた気がする。

あれは今年の春だったな。お母さんがベッドの脇にぼくを呼んで、いつもとちよつと違う目で、ぼくに言ってきたんだ。

「ケンイチ、お母さんがいなくなっても、おまえは一人で生きていけるね」

うん、とぼくはうなずいた。お母さんが一人で買物に出掛けたって、ちよつと用事でお家を留守にしても、ぼくはちゃんと一人でお留守番できるから。

「お母さん、どこかにお出掛けするの？」

ぼくはうれしくなって聞いた。お母さんはこのところ、ずっとお蒲団ふとんで寝てばかりいて、いつもお家うちの中にいたからだ。お母さんがお家うちにいるのは好きだけど、元気が無くて仕方なくお家うちにいるんじや可哀想だ。だけどまたどこかに行けるくらい、お母さんは元気になったんだと思った。だからぼくはうれしくなったんだ。

でもお母さんは悲しそうな顔をした。

「お母さんは、もうずっと帰ってこないんだよ」

「よ、夜まで？」

「もちと」

「じゃ、じゃあ、…一カ月くらい？」

お母さんはお正月をはさんで、一カ月くらいニューインしていた。病院のベッドですつと寝ていたんだ。思い出して、ぼくはたちまち悲しくなってしまった。あんなに長い間、また一人でお家うちにいるなんて、寂しくて嫌だいや。やっぱりビールケースを並べただけのベッドではだめで、ちゃんとした病院のベッドじゃないと、ビョウキが治らないのかもしれない。

「おまえは働くの、好きかい？」

お母さんはなんだか急に違うことを聞いてきた。

「うん」

ぼくはそう返事をしたけど、それは本当じゃなかった。怒られるし、臭かったから。それにみんなはぼくがずっと同じことを退屈もせずによつてると思っているのだろうけど、ぼくだってあんまり同じことばかりやらされれば飽きる。いつもリンゴやニンジンの腐ったところばかりほじっていれば、誰だって嫌になるはずだ。

「じゃあこれからも、ずっと働くのかい？ あそこの工場で」

お母さんは少し恐い目になってぼくを見た。なんだか、いつものお母さんとは違うみたい。白髪しろがの伸びたシワの顔がそういう目で見上げてくると、背中が少し、ぞうとした。

「でも、まあ、他のところへ行ったらって、おんなじだね。どんなに働いたって、おまえじやあ、お家賃と食べるだけくらいのお金しかもらえないだろ」

お母さんは溜め息をついてから、天井に向かってしゃべった。

「生活のために働いて、働いて、イッショケンメに働いて、その挙げ句、生きてることを忘れてしまうんだよ」

「ぼくは生きているよ。忘れていないよ」

忘れることはいけないことだ。忘れるから叱られたりするし、メイワクを掛けたりするんだから。でもぼくが忘れるのはいつもこれからやらなくちゃいけないことで、もうあった昔のことはちゃんと憶えている。

例えばぼくが三歳の時、お母さんと一緒にリョコウに行った先で、ぼくたちはお昼ご飯を食べることになった。ガラスのケースの中に、プラッチックの料理がいっぱい並んでいて、ぼくはその中の一つに指をさした。

「サンサイうどんがいいの」とお母さんが聞いてきた。ぼくはその時、それは三歳の子供のためのうどんなのだと信じ込んでしまったから、「ケンくん三歳だから、三歳うどんを食べるよ」って、張り切って言ったんだ。そう、あの頃は自分のことを、ケンくんって呼んでいた。そのうどんがあんまりおいしくなかったこととか、店のおばちゃんがお茶を注ぎ足しに来たとき、「まあかわいいぼくだこと」って、銀歯をギラリと光らせて笑ったことも憶えている。

それからぼくが小学校に入るとき、ぼくが普通のクラスに入れるかどうかで、チノーストってやつをやらされたのを憶えている。その時にテストの紙に描いてあったズケイは、

いくつかはまだはっきりしている。そこに色を塗りたかったのに、色エンピツがもらえなかったことと、茶色い上着のおじさんの先生が、困った顔をお母さんに向けたことも。

昔のことはまだまだたくさん憶えてるけど、全部思い出していたら時間が掛かっちゃうから、ぼくはお母さんのことに話を戻さないかね。

生きているのを忘れるなんて、変なことだなんて思った。動いていれば、それが生きてることだから、忘れそうになったら体を動かしてみても、思い出せばいいんだ。ぼくは自分が生きているのを忘れていないことを見せるために、ぐるぐると腕を振り回してみせた。けどお母さんはますます悲しい顔を見せた。

「ただ毎日の生活を繰り返しているだけでは、生きてるなんて言えないんだよ」

「ぼくたちは生きてないの？」

ぼくはびっくりして聞いた。

「生きてるさ。生きてるけど、生きてるかどうか、分からない生き方だね。毎日同じことの繰り返し。いいことも、悪いことも、どっちも少しばかりで、でもどっちかかって言えば、悪いことのほうが多いようで、不満がいつもありながら、何に不満なのかもはっきりと分からずに、ただ、べろべろと意味もなく生きてるのさ。自分の好きなように生きるなんて、夢のまた夢で、溜め息をつきながら、今日もまた昨日や明日と同じ生活を続けていくんだよ」

ぼくにはお母さんの言っている意味が分からなかった。いつもはなんでも分かりやすく話してくれるお母さんが、この日だけは、ぼくにはリカイできないことを話した。

「いったい何をしたら、幸せになれるんだろうねえ…」

お母さんはまた天井にしゃべった。それからまたぼくに顔を向けると、かすれた声で聞いてきた。

「おまえは何か幸せだったことが、今までにあったかい？」

気づくと、お母さんの目には涙がにじんでいた。なんだかぼくも涙が出そうになったけど、すぐに泣いちゃいけないと言われてるから、ガマンして答えた。

「う、うん」

うなずいたぼくに、お母さんはなんだか不思議そうな顔を見せた。

「エンソクのお母さんが作ってくれたオニギリ、おいしかった。…えっと、いつもおいしかったけど、四年生の時が、一番…」

「それから？」

「この前ハンチョーさんが、ザンギョー代だつて言ってくれたおまんじゅうが、おいしかった…」

お母さんはじつとぼくを眺め、そのあとずいぶん長いこと黙ったままだった。じつとしているのが苦手なぼくが、もじもじしたくなってくる頃、やつとまたしゃべってくれた。

「幸せなんてものが、本当にこの世にあるのかねえ…」

あんなに悲しそうなお母さんの顔は見たことがない。だからぼくは、とうとう泣いてしまった。泣いているぼくに、お母さんは優しい声で言ってきた。

「いいかい、ケンイチ。お母さんは天国に行くからね。天国でお母さんは幸せになるけれど、おまえはこの世で幸せを知りなさい」

「て、天国？」

とてもきれいでいいところだと聞いたことがある。生きていては行けないと思っていたのに、お母さんはどうやって行くんだろう。

「お、お母さん、ひと、一人で、行くの？」

「おまえを連れて行くことも考えたけど、それではお母さん、天国に行けないからねえ」

「どうして？ ぼくがいると、じゃ、じやまなの」

お母さんは溜め息をついた。いつよりも大きく。ビョウキがひどくなってからは、お母さんの息は臭い。だからぼくは鼻の奥を閉じて、お母さんの息を吸わないようにした。

「お母さんは死ぬんだよ」

ぼつりとお母さんは言った。驚いて大きく息を吸い込んでしまい、ビョウキの匂いが口から入ってきた。

——死ぬ。はつきりとは分からないけど、死ぬと動かなくなって、オハカに埋められなくちゃいけないんだ。ぼくが飼ってたインコのキューちゃんも、『死んだ』から動かなくなつて、オハカに埋めてあげなくてはいけなかったんだ。

そして死ぬと、もう二度と会えない。

「お、お母さん、…動かなくなるの？」

ぼくは恐る恐る聞いた。

「そうだよ」

「オ、オハカに、入るの？」

「そうだよ」

「お母さん、つ、土になっちゃうの？」

死ぬと土になってしまふ。ぼくがそう思ったのは、キューちゃんのオハカを近所の公園に作りに行ったときのことを憶えていたからだ。「キューちゃん地面の中で、苦しくないのかな？」そう聞いたぼくに、お母さんはこう言ったんだ。

「キューちゃんはここで土になるんだよ。土になって、公園に遊びに来たおまえのことを、ここから見てるよ」

それからぼくは公園に行くたびに、植木の下のおハカのところから、土になったキューちゃんに見られている気がした。だからぼくはキューちゃんのために、必要以上に楽しそうに遊んでみせたものだ。それまでは座ることしかできなかったブランコも、立って、大きく揺らしてみたりした。サビた鎖くわがギリギリ鳴るのが怖くて、たまにぼくは泣きながらブランコを漕いでいた。

「お母さんは、土になったりしないよ。人間だからね。モヤされて、オハカに入行って行くだけさ」

土にはならなくても、オハカに入るとのことまでは決まっているらしい。

「もう会え、会えな、く、なつ、ちゃうの？」

とうとう、ぼくは声を上げて泣き出した。お母さんがお蒲団の中から魚の干物みたいな腕を伸ばして、ぼくの手を触って言った。

「その代わりケンイチ、もうあんな工場には行かなくていいからね」

ぼくはびっくりして泣きやみ、お母さんを見た。お母さんは笑っていた。

「お母さんが死んだら、ゴヒヤクマン円、お金がもらえるからね。いい？ 誰にもあげちゃいけないよ。自分の好きなように、自分のためだけに使うんだよ。なんでも好きなことをして、幸せに生きていけばいい」

「ギョウドンを食べてもいいの？」

「もちろん、いいよ」

「お菓子を買ってもいいの？」

「ああ、おいしいものをいっぱいお食べ。それから新しい服を買ったり、ほしがってた自転車を買ったり、寂しかったらまたインコやネズミでも飼えばいいよ。それに、どこか遠いところに行って遊んだりすればいい。こんな小さな汚い町から離れて、すれ違う人が、おまえの顔を見ただけで笑ったりしないところへね」

「じゃあ、ぼく、天国に行くよ。どこでキップを買えばいいの？」

キップの買い方は知っている。電車に乗るときは、駅の窓の向こうの青い服のおじさん

に、行きたいところを言ってお金を払う。バスに乗るときは、ウンテンシユさんに「いくらですか」と聞くんだ。

「天国に行くキップはどこにも売ってないけど、おまえが全部お金を使い終わったとき、天国に行くかもしれないね」

どういうことか良く分からなかったけど、とにかく早くお金を使えばいいんだと思った。でもお母さんは難しいチュウモンをした。

「だけど本当に自分がいいと思うことに使わないとだめだよ。食べ切れなくらいのアイスクリームをいっぺんに買って溶かしてしまったり、自分の歳に似合わないおもちゃばかり買ってはだめだからね。むだなことはだめ。でも本当に自分がほしいと思ったときは買えばいい。やりたいことがあったら使えばいい。あとで悔やまないようなことに、お金を使いなさい」

それから何日かあとに、工場からお家うちに帰ってくると、お母さんは動かなくなっていた。そのうちに知らないおじさんたちが来て、死んだお母さんを箱の中に入れた。知らない別のおじさんとおばさんも来て、オソウシキつていうのをやった。ぼくだけが泣いていた。

ホッカイドウに最初に着いたときも、ぼくは泣いていた。でもそれは悲しくて泣いていたんじゃないで、うれしくて泣いていたんだ。だってここに来れば、お母さんに会えると思ったから。

トマコマイというところで、ぼくはお船から降りた。みんなが歩いていくほうと一緒のところ歩いていったけど、そのうちにみんなばらばらになってしまって、ぼくだけがどこに行ったらいいのか分からなくなってしまった。ぼくはトラックがいっぱい止まっているところに歩いていった。大きなトラックが、ぼくは好きだから。

「兄ちゃん、なんしとんの？」

ぼくがトラックを見てみると、後ろから声が出た。振り返ると、金色の髪の毛をした、痩せたや恐そうなお兄さんがタバコをくわえてぼくを見ていた。

「き、きれいだな、なってお、思っ…」

ぼくはキンチョウする時々、言葉が素直に出てこなくなる。

「あん？　こん絵かい」

お兄さんはトラックの箱に描いてある絵を、とがった顎あごでさした。一面のお花畑の絵だった。紫、ピンク、白、黄、赤のお花。それから葉っぱの緑。遠くに深緑色の森。青い空。

「きれいっしょ？ どこだか知ってつかい？」

「て、天国かな」

天国はお花がいっぱい咲いているんだって、お母さんが言っていた。こんなにたくさんのお花たちがぎっしりと咲いている場所は見たことがなかったから、ぼくはこの絵は天国が描いてあるに違いないと思った。

お兄さんは紫色の太いズボンのポケットに、両手を突っ込んだまま、のけ反って笑った。くわえたタバコを飲み込んでしまわないかと、心配してしまった。

「まあ、そんなところっしょ。『キタノテンゴク』って、ちゃんと書いてある通りだね」

お兄さんはまた顎で箱の隅をさした。紫色の文字で『北の天国・富良野』と書いてあった。最初がキタノテンゴクって書いてあるのは分かった。三つのカンジはキタ、テン、クニ。テンとクニで、テンゴクって読むんだ。でも棒のあとの三文字が読めなかった。

「こ、こ、これは、なん、なんて、読む、読むんだろ」

バカだということがばれそうで、ドキドキしながら、指をさして聞いた。

「あ？ そりゃ『フラノ』って読むんさあ。兄ちゃん、ナイチからっしょ。でもホツカイドウの人間じゃなくてもフラノくらい、普通は読めるわな。有名だべ？ …あ。あーって、まあ、いいか」

なんだか一人でナットクしたようにお兄さんはうなずいて、それからポケットから右手を出すと、タバコを口から外した。

「兄ちゃん、一人でタビしてんのお？」

ぼくはうなずいた。ぼくの背中にはお兄さんからもらった大きなトザンザックがある。

どう見たって『タビ』している格好だ。

「今日行くアテはあるんかい？」

お兄さんはタバコを指で弾いて捨てた。タバコやゴミをやたらと捨てちゃいけないんだけど、何か言うと怒られそうだったから、ぼくはそれは言うのはやめて、お兄さんの聞いたことに答えた。

「天国…」

またお兄さんは笑った。大きな声で、本当に楽しそうに笑った。悪い人じゃないみたい。「つまり、フラノまで乗っけて行ってほしいんっしょ？ 乗んなよ、兄ちゃん」

ぼくはトラックのウンテンセキの隣のイスに座った。お兄さんはぼくを天国まで連れていってくれるらしい。

天国は上のほうにあるってお母さんが言ったのに、オハカはどうして地面に穴を掘るのかな？

ぼくを引き取ってくれたのは、ずんぐりとした大きなキノコ型のおばさんと、まじめなサヤエンドウみたいなおじさんだった。

「お、お母さんは、こ、この中に、い、いるの？」

オハカを指さして聞いたぼくに、おばさんが答えた。

「そうだよ。すやすや寝てんだよ。もう起きないけどさ」

「て、て、天国には、行か、行かなか、かったのかな？」

首を傾げたぼくに、おばさんは大きなお腹を揺らして笑った。

「天国だって！ あの女が、行くかねえ！」

おい、とおじさんが恐い目をして、丸眼鏡の奥でおばさんをにらんだ。それからおじさんはぼくを見上げて、緑色っぽい顔で笑った。

「オハカの中にはオコツがあるけど、お母さんのタマシイは天国に行ってるはずだよ」

「そんな難しいこと言ったって、この子に分かるもんか」

おばさんはおじさんをにらみ返して言って、そのあとでぼくに顔を向けた。

「そうそ。あんたのお母さんは、天国に行ったんだよ」

「じゃ、じゃあ、さつきこ、この中で寝て、寝ているって、い、言ったのは？」

「あら。ちゃんと憶えているんだね。どれくらいアレなのか、分かりやしない。——天国だよ。天国。そう思っておけばいいよ」

「じ、じ、じゃあ、オハ、オハかっつてなに？」

ぼくはお母さんのオハカを見た。回りのほかのオハカよりも、うんと小さい。と言うよりも、どこかで拾ってきた石みたいだった。

「意外としつこいねえ。オハカはあんたのお母さんを思い出すところさ。ここにきて、手を合わせて、お母さんのことを思い出すためにあるんだよ」

そんなことをしなくても、ぼくはお母さんを思い出せし、これからも忘れることがないと思う。なのにオハカなんてものを作るってことは、普通の人でも、死んだ人を忘れたりすることがあるんだね。

そうしてぼくはそのおじさんとおばさんのお家で暮らすことになった。おばさんはお母さんと違って、ぼくが台所に立つと怒った。ぼくはちゃんとお鍋でご飯が炊けるし、シチ

ユーと、ヤキソバと、インタセント・ラーメンが作れるのに。

そのうちにお母さんが言っていたゴヒヤクマン円というお金を、知らないおじさんが持ってきたけれど、その時はおばさんもおじさんも一緒にいて、なんだか真剣にお話を聞いていたみたいだった。ジジョウをリョウカイしてトクベツにテワタシとかなんとか言っていたけど、退屈な話だったからほかのことを考えていた。つまり、ぼくとおばさんが並んで正座していると、畳がずいぶんへこむんだなあってこと。

「ケンちゃん、このお金だけどねえ」

知らないおじさんが帰ったあと、おばさんはエプロンの奥に、お金の入った袋を持った両手を隠したまま、いつもより優しい声と顔でぼくに言ってきた。

「無くすといけないから、おばさんが預かっというてあげるからねえ」

どうしていつもは笑わないおばさんが、今日はにこにこ笑っているのかなと考えたけど、ぼくがお金持ちになったことが、きつとうれしいんだね。

「分かったわね」

ぼくがなにも返事をしないうちから、おばさんは違う部屋に行ってしまった。ぼくは部屋に残ったまま、まだどうしようかと考えていた。お母さんは人にあげちゃいけないって言ってたけど、でも、あげるのと預けるのとは違うことだよ。確かにぼくはうっかり物を無くすことがあったから、そのほうがいいのかもしれないと考えることにした。

「ほら、兄ちゃん、フラノだよ」

ぼくはトラックのお兄さんの声で起こされた。お母さんに会えたのは、夢だったみたい。だけどここに来れば、本当にお母さんに会えるかもしれないと思って、ぼくはうれしくて仕方がなくなった。

でも、天国に来たはずなのに、お花畑はどこにもなかった。道路と、お家と、橋と、川。右手の山にも、お花が咲いているふうには見えない。

「あ、あ、あの、お、お花畑は、ど、どこ…」

「ああ、俺のトラックに描いてあるとおお？ ちよつとなあ、そこまでは連れてってやれねえんだよ。悪いけど、駅でいいべ」

ぼくは駅で下ろされた。ぼくの住んでいた町の駅と同じくらいの大きさの、そんなに大きくはない駅。でもぼくの町の駅と違って、きれいで、音楽が流れてて、若い女の子がたくさん歩いていて。

「あ、あの、いくら…」

ウンテンセキの方に回って聞いた。乗せてもらったんだから、いくらかお金を払わなければいけないと思っただ。

「は？ なに言ってるのお。ヒッチハイクでお金なんて払う奴はいないっしょお。まったく、兄ちゃん、しっかり生きてけよ。なつ。ホッカイドゥはいいとこだから、ゆっくりタビしてみなよ。夏のホッカイドゥはほんとに天国だからよお」

お兄さんはウンテンセキのドアを勢い良く閉めると、駅前の花壇を回って行ってしまった。クラッチオンを大きくブーツと鳴らして、左に曲がっていった。

ぼくは重たいトザンザックを背負って歩き出した。適当に、トラックの走っていったあとを追うように、駅前の信号のところで左に曲がって、道なりに歩いていった。

お家にはさまれた普通の広さの道路が、少し広い道路と一緒になつて、お家の数が少なくなると、線路が左手に見えてきた。道路はまっすぐで、左手の線路もまっすぐ。回りに田んぼや畑がある。右手の遠いところには高い山があつて、左手にも正面にも山があるけれど、道路は見えなくなるまで平らだった。デンシンボーがずうつとまっすぐに並んでいる景色を見ると、ぼくは改めて、遠いところに来たんだなあという気持ちになった。

それにしても、お花畑はどこだろうと考えながら歩いていると、ぼくを追い抜かした車が、急に道路の脇に止まった。荷台のある、白い小さなトラックだ。背の低い優しそうなおぼさんが、のっそりと降りてきた。

「お兄ちゃん、ナイチからあ？」

手拭いてぬぐを被ったおぼさんは、顔にシワを増やしながら聞いてきた。それとも笑つてたのかな。でもナイチつて、さつきからいったい何のことだろう。

「あ、あの、ぼく…」

「ああ。キャンプ場。歩いていくには、ちょっと遠いんでないかい？ おぼちゃんが、乗せてあげっからあ」

ぼくはなにも言わなかったのに、おぼさんはぼくを押しして車に乗せ、走り出した。線路を渡つて、田んぼと畑の間の道路を走つて、ずっとまっすぐ走つて、森が道路をはさんだところの手前で左に入つて、オートバイがいっぱい止めてあるところで止まった。

「ライダーの人とか、みんなここにキャンプ張つてっからねー。お兄ちゃんも、キャンプっしょ？」

ぼくはテントを持っているから、キャンプって言うんだよね。だからぼくはうなずいた。

「ところでお兄ちゃん、食べ物持ってるのお？ これ、あげっから。がんばって、キャンブやってねー」

荷台に積んであった白いビニル袋をぼくに手渡しして、おばさんは行ってしまった。お札を言うのを忘れそうになったので、ぼくは走っていく車に向かって手を振りながら、大きな声で「ありがとう」と叫んだ。

で、せっかくおばさんが連れてきてくれたのだから、ここにテントを張ることにした。ぼくはキャンプ場の入り口に歩いていった。

そこで出会ったのが、カチくんだ。入り口のすぐ近くのオートバイから、荷物を下ろしているところだった。赤いジャンパーにジーパン姿で、オートバイは緑色だったから、ハデでカッコイイっていう感じだった。

「こ、こんにちは」

ぼくはちよつとキンチョウして挨拶をした。キャンプをするのは中学のリンカン学校以来だったから、キャンプをすること自体にキンチョウしていたんだ。

「ああ。こんにちは」

カチくんは、——このときはまだ、当然名前を知らなかったけど、挨拶を返しながら、ちよつとだけ鋭い目つきでぼくを見てきた。恐い人なのかなって一瞬思ったけど、次に、すごく気軽な雰囲気でしゃべってきてくれた。

「歩きでやってんの？」

ぼくはカチくんの言ってる意味がすぐに分からなかった。カチくんはちよつと首を傾げてから、ゆつくりとした丁寧な言葉で聞き直してきた。

「歩いて、ホツカイドウを回ってるの？」

「く、車に、トラックに、の、乗せて…もらって」

「へえー、ヒッチハイク。乗せてもらえる？」

カチくんは今度はにっこりと笑顔を見せてくれた。笑顔になると、急に優しくそうな顔になるんだ。だからぼくはもう、あまりキンチョウせずにはしゃべることができた。

「な、なんだか、勝手に乗せてくれるよ」

ぼくがそう答えると、カチくんはおかしそうに笑った。ぼくはよく自分が言ったことで人に笑われるけど、不思議とカチくんの笑い方は、ぼくを傷つけなかった。本当に楽しそうに笑っていたからかな。だからぼくもなんだか楽しくなって、一緒に笑った。

「タビのサイノウがあるんだな」

カチくんの言ったことはあんまりしつかりとは分らなかったけど、つまり、ぼくがタビがうまいってことなんだろうな。でも、ぼくは実を言うと、テントの張り方を知らなかった。だから今度はバカにされるかもしれないなかったけど、この人にテントの張り方を聞いてみようと思った。

「あの、でも、ぼ、ぼく、テントの作り、方、知らないん…だけど」

ぼくは勇気を出したつもりだったのだけど、カチくんはいたずらっぽい顔をして、なにも言わずにぼくの顔を見つめてきた。

「だ、だから、教えて、く、ください」

ぼくはぺこりと頭を下げた。するとまたカチくんは楽しそうに笑って、オートバイの右と左についていたバッグを二つ、ぼくにさし出して持たせた。

「運んでくれる？ それからどこに張りたいのか、決めなよ」

カチくんは残りの自分の荷物を担いで、キャンプ場の中に歩き出した。ぼくはカチくんの後ろについていきながら、この人とはきつとお友達になれるんじゃないかと、わくわくした気分になっていた。

ぼくを引き取ってくれたおじさんとおばさんのお家で、ぼくには自分の部屋がもたらえた。前にお母さんと一緒に住んでいたアパートという名前のお家には、ぼくの部屋はなかったから、ぼくは少しだけうれしかった。少しだけというのは、やっぱりお母さんと一緒に部屋のほうが良かったからだ。

ぼくの部屋にはベンキョウ机と、イスと、ベッドと、ホンダナと、オシイレがあった。

ホンダナには本がいっぱい入ってたけど、ぼくに読める本なんかは一冊もない感じだった。ぼくはせいぜい小学校四年生の本が読めるだけだ。それでもカナがついてないと読めないカンジはいっぱいあったし、読めても意味の分からないお話とかもあったけど。

ホンダナのある壁の上のほうには、学校で見たことのある柄のポスターが貼ってあった。きつとニッポンチズっていうやつだ。ニッポンチズはぼくたちが住んでいるところの絵らしい。でもいつも不思議に思っている通り、どこにもぼくのお家が描かれていなかったし、ぼくの知ってる町の風景も描いてはなかった。

だからあるときぼくは、おじさんに聞いてみた。

「ぼくのお家は、どこにあるの？」

「……」

背の低いおじさんはうんと背伸びをして、チズの緑色の『リク』の部分の、真中の下あたりを指さした。

「でも、描いてないよ」

「おじさんは少し困ったように笑って、丸眼鏡をずり上げながら答えた。

「小さすぎて、分からないんだね」

「じゃあ、おじさんのその眼鏡で見たら、分かるのかな」

おじさんがまた困った顔をした。

「はは。おじさんの言い方が、悪かったね。これはニホンをうんとうんと小さく描いてあるんだよ。だがらいっぱいショウリヤク——うーん、本当にはあっても、描いてないことがあるんだね」

「絵のゾウが、本当のゾウより小さくて、シワとか無くて簡単に描いてあるのと一緒に？」

「おつ。なかなか頭がいいね。そういうことだよ」

おじさんは「頭がいい」なんて言ったけど、ぼくにはまだ良く分かっていなかった。だってぼくは一度も本当のニホンとかニッポンを見たことがないのだから。

「ニホンには大きく分けて、四つの島があるけど、ケンイチくんは、それぞれがなんていう名前なのか知っているかな？」

ぼくはおじさんが言ったことが全然分からなかった。海に浮かんでいるのが島なんじゃないかな？ ぼくがチズをにらんで島を捜していると、おじさんは笑いながらまた背伸びをして、右上に描いてあるエイみたいな形の『リク』を指さした。

「この一番上にあるのが、ホツカイドウ…」

「上……」

——上。ニッポンの一番上。ぼくたちが住んでいるところの上には、『ホツカイドウ』があるってこと？ ぼくは窓のところに行って、空を見てみた。でも、上にあるっていうホツカイドウの緑色の『リク』は見えなかった。

「窓からじゃあ、見えないよ。ホツカイドウは、ずっとずっと遠い、あっちのほうにあるんだから」

おじさんは部屋の壁のほうを指さした。

「上じゃないの？」

「まあ、キタの方を、上って言うんだね」

それからおじさんはチキュウがどうのというお話をしてくれたけど、ぼくにはなんだか

よく分からなくて、結局ホツカイドウはやっぱり上にあるんだってことだった。

でもつまり、ぼくたちが住んでるところの上にあるってことは、ホツカイドウっていうのは、天国と一緒にのことなんだね。天国もぼくたちが住んでるところの上にあるって、空のうんとうんと高い、見えないところにあるって、お母さんが言ってたから。

その時からぼくは、ホツカイドウに行こうと決めたんだ。お母さんはきつとそこにいるに違いない。そしておじさんに聞くと、ホツカイドウはヒコウキや、お船や、電車や車で行けるらしい。お母さんは天国へのキップはどこにも売ってないって言ってたけど、この町じゃないところに行けば、売ってるはずだよ。映画のキップも、この町ではどこにも売ってないけど、隣の町では売ってるから。

ぼくは何日かしてから、おじさんにホツカイドウに行きたいって言った。するとおじさんは、ホツカイドウに行ったことがあるっていうお話をしてくれた。おじさんがダイガクセーだったときのことだって。テントを持ってあちこち行ったらしい。すごくきれいなところがたくさんあったって言うから、やっぱりホツカイドウは天国と一緒に場所なんだと思った。だからぼくはどうしてもホツカイドウに行きたいって、おじさんに言ったんだ。

その晩、おじさんとおばさんが、ぼくのいないところで行かしてる声が聞こえてきた。と言うか、おとなしいおじさんが、おばさんに怒られてるって感じだったけど。ぼくはこっそりその部屋の近くまで行って、二人の声を聞いた。

「だからちようどいいじゃないのさ。行かせてやればいいんだよ！」

おばさんの声。それからおじさんの声。

「でも、どうするんだい、もしものがあつたら… いや、あるに決まってるし。そんなことになったら、セケンテーにも聞こえが悪いし…」

「ふん！ あんなのがウチにいるほうが、よっぽどセケンテーが悪いんだよ！ それにイマドキ小学生だって、一人でホツカイドウ行くくらいするさ！ アレだつて一応、ニジュウヨンだよ。行きたいってところに行かせるくらい、誰もなんとも言いやしないよ！」

「きみは、何かあつたほうがいいんだろう？」

「そりやそうさ！ なんてウチラがあんなのメンドウを見てかなきやいけないのさ？ いなけりやいな時間だけ助かるし、帰ってこないなら、そのほうがずっといいね！」

「何かがあつて、引き取りに行くことになるかもしれないだよ」

「ハハ！ アレがこのジュウショや、電話バンゴーが言えるわけないだろ？」

「じゃあ、言えばノタレジニさせても…」

二人のお話はまだ続いていたけれど、ぼくはまたこっそりお部屋に戻って、壁のニッポンチズを眺めた。おぼさんは、ぼくがホッカイドウに行くことにサンセイしてくれているみたい。

その翌日の夕方、おじさんがどこからトザンザックとテント、それからネブクロとかギンマットとかハンゴーを持ってきた。昔、おじさんが使ってたものだって。ぼくはそれに服とパンツとクツシタと、ハシとかハブラシ、ハンカチにカセットコンロなんかを持って、ホッカイドウに行くことになった。

キャンプ場の中をぐるぐる歩いて、ぼくはやっぱりカチくんの近くにテントを張ることに決めた。真中の広場の奥の、何本か木が立っている芝生しばふのところだ。そこにはもうカチくんのお友達が先にテントを張っていて、丸い屋根のきれいなテントが五つ、半円に並んでいた。お友達はウメちゃん、マメヤン、ジルさん、アミちゃん、ミルコちゃんの五人。みんなはニッポン中のいろんな場所から、ホッカイドウにやってきたんだって。

「げーっ、ふっるいテントだなあ！」

ぼくがトザンザックからテントを出して広げるなり、マメヤンが叫んだ。マメヤンは昔、ポーソーゾクの頭をやっていたらしくて、今は少しカールした長い髪かみの頭をしている。顔は恐くて、口が大きくて、体もみんなの中でぼくの次に大きかったけど、すぐにいい人だと分かった。カチくんのお友達はみんないい人だった。

ぼくをよくオートバイに乗せてくれたウメちゃんは、腰までありそうな長い髪を一本のミツアミにして、後ろ姿はちよつと大きな女の子みたい。ブショーヒゲが濃いけれど、小さな目の、優しい顔をしてたから、ぼくは男の人の中ではウメちゃんが一番しゃべりやすい相手だった。

「カビがいっぱい生えてるよお」

そのウメちゃんが、ぼくの黄色いテントに点々ちりちりとついている黒いカビを見つけて笑った。カチくんも笑っている。赤いジャンパーを脱いでTシャツになると、カチくんはテントの床を芝生の地面に広げて、テントの棒をその前と後ろに立てた。

「壁と床がベッタいのテントなんて、もう誰も使ってねーだろうな」

「リンカン学校を思い出しちゃうよなあ。俺たちの頃、テントってこんなだったもんな」
 ジルさんもそう言って珍しそうに見ている。ジルさんはみんなの中で一番年上の感じで、たぶんぼくより十歳近く歳を取ってるんじゃないかと思う。静かなフニイキの人で、耳が

隠れた髪型で、いつも茶色い眼鏡をしていた。

二人の女の子たちもロープを張るのを手伝ってくれたりして、ぼくのテントは立派に立った。女の子たちは、ぼくの三角形のテントの回りをぐるりと歩きながら眺めて、くすくすと笑った。アミちゃんはトーンキゴーみたいな髪型をした、どこかキツネっぽい顔の子で、こんなふうにも笑ってる感じの子だ。ぼくはよくからかわれたけど、ぼくはなんだかアミちゃんにからかわれるのは好きだった。子猫が足にまとわりついてきて、それで転んじゃっても、誰も子猫を嫌いにならないようにね。

ミルコちゃんはジルさんと仲が良くて——カノジョって言うのかな、ずいぶんおねーさんの落ち着いたフニキがあっただけど、やっぱりよく笑う人だった。スタイルが良くて、足がぼくよりもうんと長い。もっともぼくの足は、たいていの人よりも短かったけど。

その日、ぼくは晩ご飯にシチューを作った。ぼくをここまで乗せてきてくれたおばさんがくれたビニル袋の中に、シチューのモトと、タマネギ、ニンジン、ジャガイモ、ブロッコリが入っていたからだ。おばさんはどうしてぼくが作れるおかずを知っていたのかなあ。

ぼくがホーチョーで野菜を切ってハンゴーに落としていく様子を、みんなはちよつと感心したみたいに眺めていた。でもぼくがカセットコンロを取り出すと、みんな声を出して笑った。こんなのを持って、しかも歩いてタビしている人間なんて、初めて見たと言われた。みんなはもっと小さな縦型のコンロを使っていて、なぜかそのことを『ストーブ』と呼んでいた。ぼくの知っているストーブとは、ずいぶん違うのだけど。

ハンゴーをコンロの火にかけると、また少し笑われた。ハンゴーでシチューを作るのは変だとみんなが言った。でもぼくはほかにリョウリキグを持っていないから仕方がない。

みんなは一人一人ばらばらに自分の晩ご飯を作って、それぞれ出来上がるとこれまたばらばらに食べ始めた。ぼくもシチューができたので、ハンゴーから直接食べた。ぼくはお皿も持っていないかった。

「なんだ、それだけで食ってんのか」

カチくんがぼくを見て言ってきた。うなずくと、カチくんは自分のナベからスプーンでご飯を取って、ぼくのハンゴーの中に入れてくれた。

「ほら、少しやる」

確かに少しだったけど、すぐに今度はウメちゃんとマメヤンの手が伸びてきて、ハンゴーの中にはゲンコツくらいの量のご飯がたまった。それだけじゃなくて、アミちゃんはウインナーを二個入れてくれたし、ミルコちゃんは野菜炒めを入れてくれた。さらにジルさ

んはハンゴーの蓋たかにスープを入れてくれて、ぼくの晩ご飯はすごいゴチソウになった。

ぼくはみんなの親切にとても感謝して、シチューをみんなに分けてあげると言った。でも誰ももらってくれなかった。みんながくれたご飯やおかずと混ぜってしまったし、それよりも、ぼくがスプーンをべろなめながら突っ込んでいたかららしい。

まあとにかく、こんなにたくさんのおかずを一度のご飯で食べられるなんて、小さい頃の誕生日に何度かあったくらいだ。だからぼくはすごく楽しくなって、なんだかずいぶんいっぱいしゃべることができた。ぼくがホツカイドウを天国だと思つて来たんだと言つと、みんなはすぐくナツトクしてくれた。

「まあ、ホツカイドウは、タビビトの天国だよな。確かに」

マメヤンが言つと、みんなもうなずいた。ぼくはつい泣いてしまった。

翌日、ぼくは朝早くからキャンプ場を出て、町のほうに向かった。なにしろぼくはなんにもシヨクリヨウを持つてなかったから、なにか食べ物を買つてこなければいけなかったんだ。みんなから聞くとところによると、町までは歩いて一時間くらい掛かるらしい。つまりケイサンすると、行きと帰りで二時間だね。それくらい歩くことは今までだつて普通だったから、ぼくは空つぽのトザンザックを背負つて、教えられた道順を忘れないようにブーツ言いながら歩いた。

その日は結局、それで半日以上を使つてしまったようなものだ。ぼくは普通の人よりもずいぶんのんびり歩くと、そこら中で立ち止まつてはチヨウチヨウやカエルさんを追いかけたし、ぼんやりと突つ立つて景色を眺めたり、ヒナタゴツコをしていたので、スーパ―に着くだけでもお昼を過ぎてしまったからだ。

ぼくはお米やシヨクリヨウのほか、ナベとフライパンと、プラスチックのシヨッキを買つた。これで今日からはご飯も炊けるし、なんでもハンゴーにごちやませにして食べなくてもよくなるわけだ。

来た道を少し迷いながらキャンプ場に帰ると、ぼくたちのテントのところには、カチクンしかいなかった。他のみんなはお昼ご飯を食べたあと、どこかに出掛けていったそうだな。ぼくは何もすることがなかったから、オリタタミスに座つて本を読んでいるカチクンの横に這いつくばつて、地面に行列を作っているアリの数を数えて遊んだ。一から十まで数えたら、指を一つ折る。

左手のおねーさん指まで折つたとき、駐車場のほうでオートバイの音がした。そうして

女の子が一人やってきたんだ。片手にヘルメットをぶら下げて、キャンプ場の入り口あたりに張つてあるテントの間をキョロキョロしながら歩き始めた。その様子を見つけたとき、ぼくはあの子がこっちに来るといいなと思つた。何を捜しているのか分からなかったけど、キョロキョロしながら歩いてる姿は、なんだか大きなリスみたいで、とてもかわいく見えただからだ。

と、その女の子はぼくのいるほうに顔を向けると、捜しものを見つけた様子で急に早足になつて、まっすぐにぼくのところに向かつてきた。

ぼくはドキドキしてたまらなかつた。黄緑色のジャンパーにジーパン姿の、肩までの黒い髪の女の子は、ぼくが今までに見たどんな子よりもきれいだった。そんな子がにっこりと笑つて、どんどんぼくに近づいてくるんだ。

「あ、う…」

ぼくは隣のカチくんに、言葉にならない声を出して手を振つた。カチくんは読んでいた本から目を上げて、ぼくの指さしたほうを見た。

「カチくん！」

カチくんが顔を向けたのと、女の子がカチくんの名前を呼んだのは一緒だった。

「キョウコちゃん！」

イスから立ち上がつてカチくんも女の子の名前を呼んだ。そう、つまりその女の子がキョウコちゃんだったわけだ。

その晩は、キョウコちゃんが来たからなのか、初めからそういうつもりだったのかは知らないけど、真中の広場のところで、みんな一緒に晩ご飯を作つて食べることになった。

食べたのは『ジンカン』っていう、焚火の上にテッパンを乗せて、肉や野菜やキノコを焼いて食べるもの。ヤキニクと何が違うのってウメちゃんに聞くと、ホツカイドウで食べるヤキニクのことをジンギスカンって言つて、それを縮めてジンカンなんだつて。ぼくはこのとき初めてヒツジさんのお肉を食べた。とってもおいしくて、ぼくはジンカンが大好きになった。

ところで、この日はキョウコちゃんのニジュウヨン歳のお誕生日だったんだ。つまり、ぼくと同じ歳になつたつてことだね。なんだかそれはともうれいしことだった。

「誕生日、おめでとう」と、みんながキョウコちゃんに言った。ぼくは立ち上がつて、『ハッピーバースデーチュー』を歌つた。みんなも大きな声で合唱してくれた。歌い終わると、みんなは拍手をして、何人かが口笛を鳴らした。ぼくもイッショケンメに口笛を吹こ

うとしたけど、唾つよがいっぱい飛んだだけで、隣のアミちゃんに頭をたたかれてしまった。「ありがとう」

キョウコちゃんは立ち上がって、みんなにお礼を言った。ぼくのほうにも顔を向けて、にっこりと笑ってくれた。遠くの林のテントの方からも「おめでとー！」と誰かが叫んで、キョウコちゃんはそっちに向かつて「ありがとうー！」と大きな声でお礼を返していた。その晩ぼくは、生まれて初めてお酒を飲んだ。カンビールを渡されて飲んだんだけど、とても苦くて口の中がブクブクなったから、すぐにその場に吐き出した。「ドラ、汚い！」と、またアミちゃんにたたかれてしまった。

夜はみんなでキモダメシをした。二人ずつでキャンプ場の裏の森を歩いて、道路の向この公園のアズマヤに置いたローソクを持ってくるというルールだ。カチくんとジルさんがおどかす役で、残りの男の人がクジを引いて、相手の女の子を決めていった。

ぼくはどうかキョウコちゃんと一緒になれますようにと、イッシュヨケンメに神さまに祈った。すると、ぼくがたどっていったアミダクジの先に、本当にキョウコちゃんの名前があった。ぼくはこんなにも神さまにお礼を言ったことが無い。

ぼくとキョウコちゃんが一番で出発した。キャンプ場の裏の森は小路こみちがついていたけれど、ほとんど真っ暗の黒で、カイチューデントウの光が、暗闇に食べられていくように感じられた。黒い草の中では何かが「じー、じー」と言っていて、あとはぼくたちの歩く音しか聞こえない。

けれどぼくは森の暗さや静かさよりも、キョウコちゃんと二人きりだということにドキドキしていた。

「ドラちゃん」

少し歩いたところで、キョウコちゃんは突然立ち止まって、ぼくの新しい名前を呼んだ。「オバケ、怖い？」

キョウコちゃんはいたずらっぽいな声で言っ、ぼくに顔を向けてきた。暗くて顔ははっきりと見えなかったけど、目が星明かりにキラリと光って、ぼくはキョウコちゃんのがちよつと恐くなってしまった。

「今、目が光ったよ」

首を縮めながら言うと、キョウコちゃんはおかしそうに笑った。

「じゃあ、私はフクロウみたいね。ホー、ホー」

キョウコちゃんはかわいい声で鳴きまねをして、両手をパタパタと羽ばたかせながら、

また歩き出した。ぼくもホウホウと声を出しながら、後ろについていった。

「ほら、星がきれい」

キョウコちゃんに教えられて夜空を見上げると、森の木の上には、白い雲を透かして、見たこともないたくさんの星が輝いていた。

「わああ、雲の向こうに、星がいっぱいあるう！」

びっくりして星を見上げたまま立ち止まると、キョウコちゃんの不思議そうな声が聞こえてきた。

「あれ？ ドラちゃん、アマノガワを見たことないの？」

ぼくは顔を上に向けたまま、それはどの星のことなのだろうと捜した。首をぐるぐる回している、キョウコちゃんの腕が顔の前に伸びてきた。

「ドラちゃん？ 何を捜してるの？ あの雲みたいに見えるのが、アマノガワっていうよ。あれは雲じゃなくて、星がいっぱい集まっているの」

キョウコちゃんの細くて長い指が、夜空の雲みたいなものをたどってすうっと動く。

「ほら、よく見て。小さな星たちが分からない？」

確かに言われて見てみれば、すごく細かい星が見えたりした。

「ああ！ すごく小さな星だ！ 小さな星は、星の子供なのかなあ。今日は星の誰かさんのお誕生日で、それで星の子供たちが集まって、お誕生会をやっているのかなあ？」

今日のキョウコちゃんのお誕生会を思い出して言うと、キョウコちゃんの笑い声が聞こえてきた。

「ふふふ。ドラちゃんって、ロマンチックねえ」

顔を向けると、星明かりを浴びたキョウコちゃんの顔がはっきりと見えた。キョウコちゃんは優しい笑顔を浮かべていた。

「ロマンチックって、なに？」

尋ねると、キョウコちゃんはまた、ふふ、と笑って、ぼくに背を向けて歩き出した。背を向けたまま、ぼくに言った。

「こういう星空の下で、二人でお散歩することよ」

「散歩じゃなくて、キモダメシだよ」

「そうね」

それからキョウコちゃんは声を出して、楽しそうに笑った。ぼくは後ろについて歩きながら、キョウコちゃんの背中に尋ねた。

「ぼくと二人で、嫌じゃない？」

キョウコちゃんは振り向き、歩くのを遅くして、またぼくと並んでくれた。

「どうして？」

「だって、女の子はみんな、ぼくと二人でいるのを嫌がるよ」

ぼくが働いていた工場では、時々ペアを組んで作業をすることがあったのだけど、女の子たちはぼくと一緒になることをすごく嫌がっているみたいだった。小学校や中学校の時だって、女の子は誰もぼくに近づいてさえくれなかった。

「一緒にいても全然しゃべってくれなかったり、話しかけても答えてくれなかったり、なんだかイライラしたりするんだ。普通の子は」

「私は、普通じゃない？」

からかうみたいにキョウコちゃんが聞いてくる。

「うん。ぼくといっても、楽しそうに笑ってる」

キョウコちゃんはまるで照れたようにしてにこりと笑うと、自分の顔をカイチューデントウで、下からさつと照らした。突然キョウコちゃんがオバケになったみたいで、ぼくは「ひゃーっ」と大声で叫んでしまった。その場に尻餅しりもちをついたぼくを、キョウコちゃんは照らして、また楽しそうに笑った。

その翌日に、ぼくたちはカチくんの案内で、フラノのいろいろなところを回ったんだ。最初にこの大麦とニンジンの畑だった丘に来て、その次はラベンダーという紫色のお花が一面に咲いている公園に行った。いい匂いのするトイレのような香りが漂っていて、ぼくはついウンコがしたくなってしまった。

そしてその次にぼくは、とうとうぼくを乗せてくれたあのトラックに描いてあったお花畑に行けたんだ。

そこは本当にきれいにお花たちが咲き誇ほたっていた。紫、ピンク、白、赤、橙、黄、水色。いろんな色が縦縞縦縞になって、斜面をいっぱい埋め尽くしている。真つ青な空にはヒツジさんみたいな雲が何個も浮かんでいて、斜面の上の森に逃げていくように流れている。

ぼくは大きな声で「お母さん」と呼びながら歩いた。広いお花畑の中を端から端まで、叫びながらぐるぐると歩いた。知らない人たちが、ぼくのことを不思議そうに見てきたけど、ぼくはかまわずに捜し続けた。

お母さん、ぼくはとうとう天国まで来たよ。お母さんを捜して、遠い遠いホツカイドウ

までやって来たよ。

ぼくは両手を口の横に当てて、力一杯お母さんと呼んだ。

だけどお母さんはどこにもいなかった。きつとここではないどこか別の場所にいるんだ
 と思い、ぼくはあきらめて、みんなのところに戻った。カチくんが、どうしてぼくがお母
 さんと叫びながら、あんなにも歩き回っていたのかと聞いてきた。

「ここは天国だから、死んだお母さんがいると思って」

ぼくは期待が外れて、つい涙をこぼしながら答えた。

「だってホッカイドゥは、天国だよね」

なんとなく難しい顔をしているみんなを見渡してぼくは確認した。

するとアミちゃんがとことこと近づいてきて、ぼくの頭をばかりとたたいた。

「めそめそ泣いてんじゃないよ。こつちきな」

アミちゃんは女の子にしては乱暴な言葉を使って、ぼくのヤツケを引っ張って、お花畑
 の隅のお店のほうに連れていった。

「これでもなめて、キゲンを直しなさいよ」

アミちゃんはそう言って、自分のジャンパーと同じ色の、紫色をしたラベンダーのソフ
 トクリームを買ってくれた。紫色の味がして、ぼくは本当にキゲンが直ってしまった。

結局お母さんは見つからなかったにしろ、その日はそれまでのぼくの毎日の中で、一番
 楽しかった日のように思う。もちろんそれからの日々は、よりいっそう、毎日が楽しかつ
 た。ぼくたち八人は、いろいろなところに遊びに出掛けた。

あるときは一日掛けて、遠くの山の中のロテンブロに入りに行った。川の縁かきに熱いお湯
 が湧いていて、森や川の景色を見ながらお風呂に入れるんだ。女の子たちは水着で、男の
 人たちとぼくはタオルであそこを隠して、一緒に入った。体が熱くなれば川に飛び込んで
 泳いだり、水やお湯を掛け合ったりして、疲れるほど笑わなくてはいけない一日だった。

それから別の日は、これも一日掛けて、ひまわり畑を見に行った。山の斜面に、ひまわ
 りと、トウモロコシと、ソバの畑が交互に作ってあって、ぼくたちはシャシンを撮り合っ
 たり、追っかけっこをしたり、草の斜面を転がったりして遊んだ。

また違う日は、隣のビエイというところに行った。フラノの隣の町らしいんだけど、そ
 れでもオートバイで一時間くらい掛かったんじゃないかな。途中のお店でお弁当を買った
 りしていたから、それで時間がたくさん掛かったのかもしれないけれど。

もちろん時間が掛かるのは全然かまわなかった。ぼくたちにはどれだけだって時間があ

ったし、移動しているときだつて楽しい時間だ。オートバイに乗せてもらうことが、ぼくは大好きになっていた。ぐんとカソクしたり、キュツと曲がったり、風を追い越して走ったり。時にはのんびりと、風とお話をしながら走るときもある。ライダーは風が友達なんだと、ウメちゃんが言っていた。

そうしてぼくたちはそれほどはつきりした場所の目的は持たずに、ビエイを気ままに走り回った。鮮やかな色の『ダイチ』が、そこには広がっていた。

金色の大麦畑、優しい緑色の小麦畑、深い緑のトウモロコシ畑、白や薄紫の小さな花を咲かせたジャガイモ畑、銀色の葉が輝くビートの畑、柔らかい緑のニンジン畑。

それから背比べをして並んでいるカラマツの木や、のびのびと一本だけ立っているポプラや、手をつないで立っているシラカバの木。

気づくといつも遠くには、トカチレンポウが堂々と立っていた。まるで全てのものを暖かく見守ってくれているみたいに。

そういった景色の中を走っていくと、ホツカイドウはなんて大きいんだろう、なんてきれいなんだろうと感ぜずにはいられなかった。これから向かっていく風景も、横に流れていく景色も、通り過ぎていった眺めも、みんな素敵にぼくたちを包んでいる。すれ違う畑の作物や木が、まるでぼくたちに手を振って喜んでくれているみたいに、全てが生き生きとして輝いて見えた。

オートバイを止めて一つの丘の上に立てば、そんな『ダイチ』の姿がぐるりと見渡せた。ダイチはうんとうんと遠くの山のふもとまで、はるかに広がっている。雲のはつきりとした影が、緩やかなダイチの波の上を、気持ち良さそうに泳いでいる。

そして見上げる空は、びっくりするくらいに大きかった。ホツカイドウの空がこんなに青いのは、やっぱり上にあるからなのかな。空に近いぶんだけ、空が広くて、はつきりと見えるのかな。

ぼくは跳び上がった、いくつも浮かんでいる雲の一つを捕まえようとした。だけど狙ったのは空の一番高いところにある、特別な形をした雲だったから、なかなか手が届かない。もちろんぼくは一度も雲を捕まえた人間なんて見たことが無かったから、これはちよつと無理かなとは思っていたけど。

「ドラ、なにジャンプしてるんだよ」

そのうちにマメヤンが、手を伸ばしながらいつまでも跳び上がっているぼくに尋ねてきた。ぼくはあの雲がほしいと言って、真上の、ふわりとカーブした優しい雲を指さした。

「なんだ、あのマキ雲か。肩車してやるから、手を伸ばしてみなよ」

マメヤンは笑いながら、ぼくを肩車してくれた。ぼくは太ってるから大変だろうと思っただけど、マメヤンは踏ん張って、しっかりとぼくを持ち上げてくれた。

「まだ届かないか」

「まだ届かないよ」

するとジルさんが、落ちていた木の枝を拾って渡してくれた。

「ドラ、これで引っかけ取るんだ」

ぼくは木の枝をぐるぐると回して、ワタアメみたいに雲を巻き取ってみようとしてみた。だけどまだまだ雲には全然届きそうにない。

「だめだよ。届かない」

「じゃあ吸ってみろ！」

今度はカチくんが言った。ぼくは雲に向けて口をすぼめて、思いきり息を吸い込んでみた。

「もつともつと！ がんばれドラ！」

アミちゃんが応援しながら、ぼくを肩車しているマメヤンの回りをびよんびよんと飛び跳ねた。キョウコちゃんは笑いながらそんな様子をシャシンに撮っている。ミルコちゃんの手をたたいて喜んでいいる。ぼくはみんなからチュウモクされていた。

「で、なんでドラは、あの雲が、そんなにほしいんだよ」

そろそろ疲れてきた声で、マメヤンが尋ねてくる。ぼくはちよつと恥ずかしかつたけど、訳を言った。

「あの雲は、なんだか天使さんの羽みたいなの形をしているでしょ？」

昔、絵本で見た天使の羽に、雲はそっくりな形をしていた。

「だからぼくは——」

「あー、重い！ もうだめだ！」

ふらつきながらマメヤンは叫んで、乱暴にぼくを地面に下ろした。それがあんまり勢い良かったものだから、ぼくは前のめりに倒れて、そのまま畑の土手を一段下の道路まで転がり落ちてしまった。道路の上で、ぼくの体はボヨンとマリのように弾んだ。

みんなが心配して上から覗き込んできたから、ぼくは道路に寝たまま、雲がほしかった理由を言った。

「だからぼくは、キョウコちゃんに、あの雲をつけてあげようと思って……」

みんなが笑いながら、「ひゅー」とはやしたてる。アミちゃんはキョウコちゃんの背中をたたいて、からかうような感じで言った。

「キョウコに雲の翼のプレゼントだってさ。ドラも素敵なことを考えるよねえ！」

キョウコちゃんが顔を赤くさせて、恥ずかしそうにする。

「ごめんなさい」

ぼくはキョウコちゃんにメイワクを掛けてしまったのかなと思って謝った。なぜかアミちゃんが大声で笑った。

「なに謝ってんのよ。いいのいいの！ あんた本当に最高よね！」

それから急に意地悪な顔になって聞いてきた。

「でも私には、そういうプレゼントはくれようと思わないの？」

「アミちゃんにはシッポのほうが似合いそうだから、どこかにキツネのシッポが落ちてたら、あげるよ」

ぼくは親切のつもりで言ったのに、なぜかみんなは大笑いして、アミちゃんはふんと膨れて怒ってしまった。

「こら、ドラ、おぼえてろよ！」

^{こぶし}拳を突き上げたアミちゃんのお尻を、今度はキョウコちゃんがたたいてからかった。

そのあとまた別の丘の上まで走っていく間は、なんとキョウコちゃんがオートバイの後ろに乗せてくれたんだ。ぼくは雲を捕まえてあげることができなかったのに、その気持ちのお礼らしい。やっぱりキョウコちゃんは優しいよね。

だけどぼくはキンチョウして、両手でいつもよりしっかりとシートの後ろの荷台をつかんでいなければならなかった。それはべつにキョウコちゃんの運転が下手だったり、乱暴だったりしたわけではなくて、女の子の体には触っちゃいけないだと思っていたからだ。

ぼくはお腹^{なか}でキョウコちゃんの背中を押さないように、イッショケンメに後ろにのけ反って踏ん張っていた。ふと気がつくと、バックミラーの中にキョウコちゃんの顔が映って、そんなぼくに笑いかけている。その笑顔に、ぼくはついだらしなく力が抜けて、危うく後ろにひっくり返るところだった。キョウコちゃんは運転しながら左手を後ろに伸ばして、ぼくの腕をつかんだ。

ぐいと引っ張られて、ぼくは逆らうことなく体を前のめりにした。つかまれた左腕はそのままキョウコちゃんのお腹^{なか}に回されて、ぽんとたたかれた。こうしていなさいと言っているみたい。心臓が大きくなって、体からはみ出してしまいそうになった。ぼくはびった

りとキョウコちゃんにくっついてるんだ。

キョウコちゃんの体はとても優しかった。ウメちゃんや、時々乗せてくれるマメヤンの背中に比べたら、なんとも小さくて細くて、柔らかかった。お腹なんかはずごく細くて、こんなふうにもたれていたら、そのうちにぼくの重みで折れてしまうんじゃないかと思うくらいだ。

それでもオートバイが揺れる度に、意外としつかりとした力があることが分かった。生きているんだと、ぼくは当たり前のことを不思議な感じで思った。ぼくの半分くらいの大きさのキョウコちゃんの体の中にも、ぼくと同じ分だけの命が詰まっているんだと、ぼくはなにやら感動しながら考えた。そんなふうに考えながらキョウコちゃんの体に触れているのはとても気持ちが良くて、気づいたらぼくのオチンチンはしつかりと大きくなってしまっていた。キョウコちゃん、ごめんさい。

次の目的地だった別の丘まではけっこうすぐに着いて、ぼくはほっとしたのと、残念なのが半分ずつのおかしな気持ちになった。ずっとキョウコちゃんにくっついていたい気持ちと、早く離れたい気持ちとが両方あったんだね。あんなに心地よかったことも、あんなにキンチョウしたこともなかった。

その丘でぼくたちはお弁当を食べた。一面の鮮やかな草の丘で、大きなシラカバの木が一本だけ立っている。ぼくたちは草の斜面にごろりと寝転がって、みんなでそろってお昼寝をした。

マメヤンとウメちゃんは、太陽の光を全身に浴びたまま、本当にいびきをかいて寝てしまった。アミちゃんとキョウコちゃんは、シラカバの木の作るコモレビの下で静かにすやすやと寝ている。ジルさんとミルコちゃんは一緒に近くで寝ていたけど、そのうちに起き出して、向かいの畑のほうに散歩に行ってしまった。

ぼくは大の字に体を広げて、ぶかぶかと浮かぶ雲と、高い高いところにある届かないマキ雲を見つめていた。

「ドラ」

隣に寝転がっているカチくんと呼ばれて、ぼくは顔を向けた。

「おまえはいつまで、ホツカイドウにいるんだ？」

カチくんは両手を頭の後ろに組んで枕まくらにして、空を見上げたまま聞いてきた。

「うんと、やっぱり、お母さんが、見つかるまでかなあ…」

ぼくはこの何日かの間、時々すっかり忘れていたタビの理由を思い出して答えた。

「…でも、お母さんが見つかったも、このままずっと、ホツカイドウにいたらいいな。だってここは、すごく楽しいもん」

ぼくの言葉に、カチくんは空を見たままで微笑んだ。

「ねえ、カチくん」

ぼくは今度は体ごとカチくんのほうに向けて、言葉を続けた。

「幸せって、なにすること？」

太陽に温められた草と土の匂いが、ぶんと鼻に入ってきた。ぼかぼかとした日差しが、背中にも落ちてきた。

「ぼくはオベントウのオニギリを食べたり、おまんじゅうをもらったりすることが幸せって言うんだと思ってたけど、ほ、ほんとは違うのかな？　だって前にお母さんに、幸せだったかって聞かれて、そう答えたら、なんだかお母さん、悲しそうな顔したもん」

途端にぼくは悲しくなつて、しょんぼりとした。するとカチくんは、ぷつと噴き出して、こちらを向いた。

「おまえさつき、すごく楽しいって言ってたよな」

「うん」

「じゃあそれと幸せと、何が違うんだ？」

言つてカチくんは、いたずらっぽい顔をしてぼくを見てきた。

「楽しいってことと、幸せって、一緒なの？」

ぼくはちよつとびっくりして聞いた。ぼくは何かをすることが幸せってことだと思つていたんだ。

カチくんは困つた顔になった。少し考えて、それから体を起こして、シラカバの木の向こう側に顔を向けた。

「ほら、見なよ。トカチレンポウが見える」

ぼくも体を起こして、丘の左手を眺めた。青いトカチレンポウが、雲と背比べをしていく。

「あそこや、あの向こうにあるのが、幸せさ」

ぼくはまたびっくりした。幸せって、することじゃなくて、ある、ものなんだ。

「それからそのシラカバの木の下にも、向こうの畑にも、この草の上にもある」

ぼくはあわてて体をずらして、自分のお尻の下になつてつぶれていた草を見つめた。カチくんは笑つて、さらに言つた。

「それにこの日差しの中にも、この空にも。——ほら、あそこにも」

おしまいの言葉を言いながらカチくんが見つめた先を、ぼくは目で追った。そこには、キョウコちゃんがあった。金色のコモレビを浴びて、キョウコちゃんはわずかな微笑みを浮かべて寝ていた。ぼくはじっと見つめたまま、かなり長い時間、考えていた。

「分かったか？」

カチくんの声が後ろから聞こえてきて、ぼくはやっと目をキョウコちゃんからはずして、首を横に振った。

「なんだ、まだ分かんないのか。じゃあ、今おまえは何を感じてたんだ、キョウコちゃんを見ながら」

「あ、あの、ぼくは、きれいだなあって、お、思って、見てた……」

そう答えるのはとても恥ずかしかったけど、カチくんはにこりと笑ってうなずいてくれた。

「そうだろ？ そう思う気持ちだったのが、幸せってことさ」

「じゃ、じゃあ、幸せって、きれいだったこと？」

「ははっ、そういうのもあるかな？」

カチくんは笑って、また両手を枕にして寝てしまった。ぼくはますます分からなくなつて、一人で首をひねっていた。

「なあドラ、思い切り息を吸ってみなよ。さつき雲を吸い込もうとしたときみたいに、このホツカイドウの空気を、いっぱい体の中に入れてみる」

寝転んだカチくんに言われて、ぼくは首をひねるのをやめ、口から一杯に空気を吸い込んでみた。横でカチくんが言葉を続ける。

「それでもう一度、自分の回りに広がる世界を見渡してみろよ」

ぼくはイッシュケンメに息を吸い続けながら、ぐるりと顔を回してみた。

「どうだ、幸せがいっぱい入ってきただろ」

カチくんはそう言つて、大きな声で笑った。ぼくは息を吸い込みすぎて苦しくなつてしまい、ちよつと涙が出てきたけれど、なんだか不思議と気分は良くて、そのあとも、何度か何度も大きく息を吸い込んだ。すごくすごく広い青い空には、ぼくがどれだけ吸っても吸い切れない、たくさんの空気があった。

そんなふうにして十日を過ごすつと、フラノの『へそ祭り』というのが始まった。お腹なかに

顔の絵を描いて、町の中をぐるぐると踊り歩くという、へんてこな祭りだ。すぐく大勢の人たちが踊ったり、見物したりしていた。

陽気な歌が流れる。通りにはいくつもの太鼓たいこが並んで、子供たちが勇ましくたたいて音を出している。色とりどりのチョーチンが夢のように灯っている。そんな中を、キャンプ場のみんなもその祭りに参加して、町の人たちと一緒に踊ったんだ。男の人たちはお腹に顔を描いて、女の子たちは白いＴシャツに顔を描いて踊った。

もちろんぼくも参加した。お腹の絵はヒョットコみたいな顔を、カチくんが描いてくれた。その顔が、ぼくが踊ったり跳ねたりする度に、実に間抜けに表情を変えて、みんなはそれを見て大いに笑ってくれた。歩道で見物している人たちも、ぼくを指さして楽しそうに笑ったり、手を振ったりしてくれる。

ぼくは張り切って、跳ねたり、踊ったり、くるくると回ったりした。カチくんも、ウメちゃんも、マメヤンも、ジルさんも、キョウコちゃんも、アミちゃんも、ミルコちゃんも、みんなみんな楽しそうに、陽気に踊った。

けれど、その祭りが終わると、みんなは一人一人ばらばらにキャンプ場を出ていった。一人出ていく度に、残った人たちは手を振ったり、旗を振ったりして見送った。キョウコちゃんが出発するときは、ぼくはオートバイに乗って走っていくキョウコちゃんの後ろ姿に手を振りながら、こっそりと泣いた。

最後に、ぼくとカチくんが残って、そのカチくんもオートバイに荷物を積んだとき、ぼくはもう一度涙をこぼした。

「泣くなよ。またどこかで会えるだろ」

カチくんは泣いているぼくに笑顔を見せた。

「ほんとに？」

尋ねたぼくに、カチくんはしっかりとうなずいた。それからオートバイにまたがると、ヘルメットを被る前に、ぼくのほうを向いて聞いてきた。

「ドラはまだ、ここに残るのか」

「ぼくも、たぶんどこかに行くよ。みんながいないと、寂しいから」

言ったぼくに、カチくんはちよっとおどけたような顔を見せた。ぼくはカチくんに一歩近づいた。

「カチくん」

「なんだよ」

「ありがとう」

ぼくはお礼を言った。今ぼくが立っているこのキャンプ場の入り口で、もしあの時カチくんと会わなかったら、ぼくはこんなにもフラノで楽しい毎日を送らなかつただろうと思う。だから一緒の場所でテントを張らせてくれたカチくんに、ぼくは本当に感謝していた。「いいタビを続けるよ。いい人生もな」

カチくんは最後にそう言つてヘルメットを被ると、ぼくにピツとかつこよく手で合図して、オートバイを発進させた。ぼくは駐車場の出口まで走つてカチくんを追いかけて、それから道路を走つていくカチくんの姿が見えなくなるまで、ずっと手を振つて見送つた。

フラノを出てからは、ぼくはホツカイドウ中を回つた。ニセコ、シャコタン、ルモイ、サロベツ、レブン、リシリ、ソウヤ、サルフツ、ビファ、ウトロ、ラウス、エリモ、ヒダカ、ダイセツ、ムロラン、ハコダテ、トウヤ、シコツ、オビヒロ、アカン、シベツ、マシユウ、ネムロ、クシロ……。ぐるぐると、実に気の向くままに、あつちに行つたりこつちに戻つたりして、三カ月以上もタビを続けた。

びつくりするくらいきれいな湖があつた。両手を広げたよりも大きなシツゲンがあつた。神さまが住んでいるような山も、山火事みたいな紅葉の丘も、人魚が泳いでいそうな海もあつた。どこでも驚くことができたし、本当に、どこに行つたつておもしろく過ごせた。

それでもぼくは結局お母さんを見つけれなかつたし、フラノで過ごした二週間くらいの日々よりも素晴らしい時は一日もなかつた。ときどきキャンプ場でテントを張っている人たちの中に入つていったけど、あの時のみんなほど、ぼくを暖かく迎えてくれる人たちはいなかった。

やがて、タビに出るときにおばさんが手渡してくれたサンジュウマン円もほとんど無くなつてしまい、ぼくはトホウにくれそうになつた。確かに考えてみればぼくは、おばさんのお家のジュウシヨも電話バンゴーも、おばさんとおじさんの名前も知らない。つまり、ゴヒヤクマン円の残りのいくらかは、——それがケイサンできないんだけど、結局おばさんにあげてしまったようなものだ。

ぼくはもう一度、フラノに戻つた。キャンプ場に行けば、ひよつとしたらまたみんながいるかもしれないと思つたから。

駅からの行き方はちゃんと憶えていた。今度は途中で遊んだりせず歩いた。一時間く

らい歩き続けて、そうしてまっすぐの道路の先に、キャンプ場の森が見えてきた時、ぼくはまるで自分のお家に帰ってきたような懐かしさを感じる事ができた。

駐車場に入って、キャンプ場の入り口に立ったとき、懐かしさで胸が苦しくなるほどだった。自然に涙が溢れてきた。

ぼくはキャンプ場の中に歩き出した。正面の広場を突っ切って、ぼくとみんながテントを張っていた場所に行った。

そこにはテントが一つだけ立っていた。長いミツアミの髪の毛をした後ろ姿が、ぼつりとオリタタミスに座っていた。ぼくが近づいていくと振り返って、懐かしそうな顔で笑ってくれた。

「あー、ドラちゃん」

小さな目を細めて、ウメちゃんはぼくの『キャンプパーネーム』を呼んだ。

「すっかり髪もヒゲものびたねえ」

ウメちゃんは立ち上がって、ぼくの肩をぽんとたたいた。夏の時よりも、ウメちゃんの青いジャンパーが汚れている気がした。

その日ぼくとウメちゃんは、二人で一緒に晩ご飯を食べた。ここにいた間に、ぼくはみんなからいろいろなりヨウリを教してもらっていたけれど、ウメちゃんの希望でシチューを作った。

ぼくはどこを回ってきたかとか、何を見てきたかを話して、それから、ここにいたみんなのことを聞いてみた。

ウメちゃんはぼつりぼつりと、一人ずつのことを話してくれた。

「マメヤンは、オキナワに行ったよ」

オキナワとは、ニッポンの一番反対側の端っこ、つまり下、らしい。でもジゴクではなくて、そこもとてもいいところだそうだ。

「ミルコちゃんとジルさんは、ニセコでスキー場のアルバイトをもうすぐ始めるらしいよ」

アルバイトってことは、働くってことだ。つまりここで出会ったみんなも、いつもタバかりしているわけではなくて、働くときはちゃんと働いているんだね。

「アミちゃんはずいぶん前に家に帰ったし…」

ウメちゃんはなんだか途中の感じで口を閉じて、そのまま黙ったままだった。スプーンを止めて、シヨッキの中のシチューをじっと見つめたまま、動きもなかった。

「カチくと、キョウコちゃんは？」

ぼくは下を見ているウメちゃんに、一番知りたかった二人のことを聞いた。

「やっぱり、ドラちゃん、知らなかったんだ…」

ウメちゃんは下を見たまま返事をしてから、ぼくを見て、小さなふるえるような声で、ぼつりと言った。

「二人は、死んじゃったよ」

「え!？」

ぼくはびっくりして、手に持っていたスプーンもハンゴも落としした。シチューがこぼれて、靴に掛かった。ウメちゃんは小さな声のまま、ぼくに聞かせてくれた。

「二人乗りでルモイのあたりを走ってたときに、後ろからトラックに突っ込まれたんだって。ガードレールを越えて、崖の下の海に落ちたらしいよ…」

…死ん、だ？ 何かぼくの目の前で、くるくる激しく回った。ホツカイドウは天国のはずなのに、どうして人が死ぬんだろう？ ぼくの好きだったキョウコちゃんと、あのかっこいいカチくんが、どうして二人そろって死んじゃったんだろう？

「一カ月くらい、前かな。ジコがあつたのは。…ここを出ていったあと、二人はまたすぐに偶然に出会って、それからはずっと二人で一緒に旅してみたんだよ。一度俺も会ってるんだけどさ、すごく幸せそうで、元気だったのに…」

ウメちゃんは小さな目に、涙をいっぱい浮かべていた。ぼくはそのウメちゃんの顔がゆがんでしまうほど、たくさん泣いていた。たぶんお母さんが死んだときよりもたくさん、涙を流した。

翌日のお昼近く、ウメちゃんはキャンプ場を出ていった。マメヤンのいる、オキナワに向かうらしい。ぼくも誘われたけど、お金が無いことは内緒にして断った。ウメちゃんはぼくに手を差し出して、ぼくと握手をしてから走り出した。

そうしてぼくは、テントも荷物もキャンプ場に置いたまま、この懐かしい丘の上まで歩いてきたんだ。いろいろ道に迷ってしまったから、着いたのは夕方に近かった。

丘の上の景色も、丘からの風景も、みんな変わってしまった。キョウコちゃんと手をつないで走った大麦の畑もニンジン畑も消えていたし、見下ろす田んぼと畑は土色に変わっていた。森は赤茶色になって、トカチレンポウの上には雪が積もっていた。

ぼくは以前は大麦の畑だったところの土の上に腰を下ろして、このフラノであったこと

をゆっくりと思いついていった。一つ、また一つと。見える景色は変わっても、思い出の中の景色は変わらずに、その時のままに浮かんできた。

ぼくはやがて、それらの中でもおそらく一番大切な思い出をよみがえらせた。それはへそ祭りの前の日、夜中に、ぼくたちの隣にグループを作っていたライダーたちも誘って、みんなでトカチダケにあるロテンプロに行ったときのことだ。

ぼくはいつも通りにウメちゃんの後ろに乗せてもらって行ったんだけど、暗い山の道はずんずん上って山のロテンプロに着いたときには、すっかり体が寒くなっていた。みんなもそうだったんだろうね。あわてて湯の中に入ってしまった。最初は熱く感じたけど、それは体が冷たかったからで、そのうちにちょうどいい湯加減だと分かった。

タダで入れるそのロテンプロには、ぼくたち以外には四人くらいしかなくて、みんなに言わせると、こんなに空⁺いているのはとても珍しいことらしい。そのうちその知らない四人の人たちも帰っていった。ぼくたちだけがその場をドクセンすることとなった。

ぼくたちはロテンプロの縁^かの岩にもたれて、お湯の中から夜空を見上げながら、いろいろなことを話した。タビのこと、山のこと、海のこと、ご飯のこと、おやつのこと、歌のこと、オートバイのこと、オンセンのこと、お祭りのこと、お花のこと、星のこと、月のこと、昔のこと、これからのこと、夢のこと…。

そのうちにみんなはしゃべるのに飽きてしまったらしく、一段上にある、べつの小さなお湯の中に入りに行った。ぼくもついていったけど、もう全然ぼくが入る隙間が無いくらいだったから、ぼくは仕方なくまた、下の大きなお湯のほうへ戻っていった。

すると、そこにはキョウコちゃんが一人残っていて、じっと静かに夜空を見上げていた。たぶん、明るい半月を見ていたんだと思う。

青い月明りに照らされたキョウコちゃんは、ドキドキするくらいビジンだった。体にタオルを巻いていたけど、胸の膨らみがとてもきれいで、ぼくはオチンチンが立ちそうになつてしまい、あわててお湯の中に飛び込もうとした。ところが足が滑って、ぼくはほとんど頭からお湯の中に落ちてしまった。キョウコちゃんはそんなぼくを見ておかしそうに笑った。それから、「大丈夫？」と聞いてきた。

「月が、きれいだね」

ぼくは顔をぬぐって、そんなことを言っでごまかした。キョウコちゃんは微笑みながらうなずいて、ぼくに軽く手招きをした。

「ほら、こっちに来れば、楽に見られるよ」

自分のもたれている岩の横を示して、にっこりと大きく笑ってくれた。ぼくは素直にしたがって、キョウコちゃんの隣に行った。二人でロテンプロの縁の岩に背中を当てて、金色の月を見上げた。

「月の中にウサギがいるって、ドラちゃん知ってる？」

キョウコちゃんはちよつといたずらっぽい感じで聞いてきた。月に本当のウサギがいな
いことは、お母さんから聞いて知っている。ただ月の模様が、ウサギが餅つきをしている
姿に似ているんだ。キョウコちゃんはひよつとして、本当に月にウサギがいるんだと信じ
ているのかなと思っただけど、ぼくよりもずっと頭のいいキョウコちゃんがそんなことを本
気で信じているはずが無いから、ぼくは別のことを言った。

「月が半分しかない今日は、ウサギさんはどこに隠れてるのかな？」

ぼくは月を見つめたまま、半分くらい真剣にギモンに思っていることを聞いてみた。隣
でキョウコちゃんが笑う声が聞こえた。

「ドラちゃんって、やっぱりロマンチックなことを言うよね」

ぼくはまだ間抜けに頭からお湯をたらしながら、顔を左に向けてキョウコちゃんを見た。
「キョウコちゃんは、どうしてホツカイドウに來たの？」

「これもちよつとギモンに思っていることだった。」

「キョウコちゃんも、誰か死んじゃった人を捜しに來たの？」

「んーん」

キョウコちゃんは軽く首を横に振った。

「私は生きている自分に会いに來たの」

どういふことか分からなくて、ぼくは瞬まばたきをしてキョウコちゃんを見つめた。キョウ
コちゃんは顔を月のほうに向け直して、静かな声で続けた。

「毎日毎日同じ生活を繰り返しているとね、自分が何のために生きているのか分からなく
なっちゃうのよ。ただ生活のために生きているなんて、それでいいのかなって…。毎日毎
日働いて、その結果貯めたお金でわずかな楽しみを買うよりも、ここにはもつと人間らし
い幸せがあるから」

キョウコちゃんの言っていることははっきりと意味が分からなかったけれど、なんとな
く、お母さんが言ったことと一緒に気がした。ぼくがキョウコちゃんの顔を見つめて考
えていると、キョウコちゃんもぼくに顔を向けてきた。ぼくは少しドキドキしながら尋ね
た。

「キョウコちゃん、幸せって、なに？」

そう、ぼくにはまだ幸せってものがなんなのか、はつきりと分かっていなかったんだ。キョウコちゃんは体をぼくのほうに向けて、ぼくを正面から見つめてきた。

「幸せはね、何かに感謝すること」

「何かに？」

聞き返したぼくに、キョウコちゃんは微笑んでうなずいた。

「そう。自分が出会えたことや、自分が感じられたこと、自分ができたこと。それを、自然とか、神さまとか、誰かに対して感謝したくなる気持ち。それが幸せなの」

キョウコちゃんの言ったことは、ぼくにもちゃんとリカイすることができた。そう、この時、初めてぼくは幸せってものがなんなのか、リカイすることができたんだ。

「じゃ、じゃあ、ぼくは、とても幸せです。ホッカイドウで、みんなに会えたから。と、特に、キョウコちゃんに、会えたから。そのことを、ぼくの、お母さんに感謝しています」

ぼくはちよつとシンミョーな顔になって言った。キョウコちゃんはぼくに、にっこりと笑った。

「私も幸せ。ドラちゃんに会えて」

キョウコちゃんの言葉は、ぼくを本当にびっくりさせた。キョウコちゃんがぼくに会えたことを何かに感謝しているなんて、考えてもいなかったことだからだ。

「で、でも、ぼくはバカだよ。バカに会えたことを感謝するなんて、変だよ」

ぼくはなんだか奇妙にドキドキしながら言った。するとキョウコちゃんは首をかしげて、まじめな顔をしてぼくを見つめてきた。

「どうして？ ドラちゃんは全然バカなんかじゃないよ。あなたはとてもまともだし、面白いし、優しいし。こんなふうになちゃんとお話だってできる。それをどうしてバカだなんて言うの？」

キョウコちゃんの目には月が映って、優しい金色の光が浮かんでいた。なんてきれいなんだろう。ぼくは幸せになった。

「ここは本当に天国なんだよね？」

尋ねながら、ぼくも体をキョウコちゃんのほうに向けた。

「だってこんなに素敵で、きれいな天使さんがいるんだもの」

一瞬、キョウコちゃんは驚いた顔をした。何かを言おうと口を開きかけたキョウコちゃ

んの言葉を遮るようにして、ぼくは、生まれて初めての告白をした。

「ぼく、キョウコちゃんのが、大好きだよ」

向かい合ったキョウコちゃんの顔に、右手を伸ばした。

キョウコちゃんはそのぼくの手を両手で握ると、そつと、頬ほほに当ててくれた。柔らかくて、暖かい、優しい頬に。そうしてキョウコちゃんはなぜだか悲しそうに視線を落とした。

「ドラちゃん、あのね…」

キョウコちゃんはぼくに何かを言いかけて、でもふと別のことに気づいたように、目ではぼくの見先を右側に向けさせた。

「ほら、月が踊ってる」

お湯の湯気と一緒に、金色の月が、ゆらゆらと踊っていた。

ああ、ゆらゆらと、雪が降りてくる。黒い夜の中から。

ぼくの体にも、雪が積もり始めている。だけどどうしてだかもう、寒さは感じない。ぼくは動けなくなってしまうように、じっとしている。

あの時、キョウコちゃんはぼくに何を言おうとしたんだろう。ホッカイドウは、本当は天国なんかじゃないよって、そう言おうとしていたのかな。

ホッカイドウが天国じゃないってことは、もうぼくにも分かってしまった。

だけどここには天使のように素敵なキョウコちゃんがいる、ヒーローみたいにかっこいいカチくんがいて、優しいウメちゃん、マメヤン、ジルさん、アミちゃん、ミルコちゃんがいる。たとえホッカイドウがこの世でも、ぼくはお母さんの言った通り、この世で幸せを知ることができたんだから、それはとてもうれしいことなんだ。

そう、幸せは確かに、ここにあった。吸っても吸っても吸いきれないほどたくさんの空気が空にあるのと同じように、感じてても感じてても感じきれないほどの幸せが、ここにはあったんだ。

ああ、ここでじっと動かずにいたら、ぼくは本当の天国に行くのかな。このまま雪に埋まって、雪の下敷きになったら、雪が溶けるときに、一緒に天国に行けるかな。そしてお母さんや、カチくん、キョウコちゃんとまた会えるかな。

ぼくはバカに生まれたから、お母さんを悲しませたり、人にメイワクを掛けたりした。キョウコちゃんはバカじゃないよって言うてくれたけど、たくさん的人是るぼくに会ったって感謝なんかしてくれなかった。だからぼくは、本当の天国には行けないかもしれないね。

そうしたら、ぼくはこの畑の土になろうかな。畑の土になって、ホッカイドウの一部になって、ここに来た誰かが幸せになるところを見ていたいんだ。

ここからみんなでトカチレンポウの下に広がるフラノの景色を見たときのように、キョウコちゃんの手をつないで走ったときのように、たとえそのときのぼくみたいに幸せを言葉でリカイしていなくても、胸の高鳴るような、心の温まるような、そして何かに感謝のことができるような気持ちに誰かがなつて、その人が、目をきらきらと輝かせてこのホッカイドウの風景を眺めるところを、そっと静かに見ていたいんだ。ここであつたことを思い出しながら。いつまでも、ずっと、ずっと――

(了)